



喪主になったら読む本

～喪主のお仕事あんしんマニュアル～



株式会社 AZUMA

 ^{ゴ ク ヨ オ}0120-66-5940

目次

■ はじめに	～これから喪主をつとめる（かもしれない？）あなたに	1
■ お葬儀の流れ（ご臨終～お葬儀～四十九日法要まで）		2
■ ご臨終からご自宅安置まで		4
	ご臨終のあとにまずすること	4
	故人を自宅に連れて帰るために	5
	自宅に帰ってまず故人にしてあげること	5
■ 決めること①	翌日までに決めたいこと	7
	葬儀の日時・場所はどうやって決まる？	7
	連絡のコツ・訃報の出し方	8
	直葬・家族葬の落とし穴	9
	知っておきたいお葬儀の費用の内訳	10
■ 決めること②	式に必要なあれこれ	11
	式場料金の相場	11
	祭壇の種類	12
	意外に量がいるお花	13
	遺影の選び方	14
	お料理の注意点	14
	お棺事情（大きさと素材）	15
	旅立ちのお支度（死に装束）	17
	寝台車と霊柩車	18
	戒名の意味・お布施の相場	18
	会葬礼状・返礼品	19

■ 1 日目に気をつけること	20
■ ご臨終からご自宅安置まで	
お布施と寸志、協力者へのお礼	21
弔電やいただいたお花の扱い	21
■ 2 日目に気をつけること	23
火葬場でのこと	24
後飾り祭壇	24
初七日法要・精進落とし	25
■ お葬儀のあと～法事とお付き合い	
お葬儀後のあいさつまわり	26
納骨・四十九日	26
香典返し	27
喪中・忌中の過ごし方	28
初盆	29
年忌法要について	30

はじめに ～これから喪主をつとめる（かもしれない？）あなたに～

葬儀、喪主、実はちょっと大ごとです。

多くの方にとって実は未知の世界ではないでしょうか。

大切な方を亡くされたばかりの方には酷なことで、心が痛みますが、これから決めなくてはいけないことはたくさんあります。

でも、実際はたっぷり時間があるわけではありません。

場合によっては亡くなった翌日にお通夜。

慌しい数日間です。



株式会社 A'ZUMA 代表 荒井昭博

悲しみの中で、追い立てられるようなスケジュールで

お金の事も、物の手配のことも、お寺のことも、

さらに参列される人のことも考えなくてはならないというのは本当に大変なことだと思います。

それでも、亡くなった方のためにいいお葬式をされたいみんなに、あの人らしいお葬式だったね、
と言ってもらえたらいいなと、きっと思われていることと思います。

AZUMA は、創業45周年。おかげさまで「満足度が高い」「スタッフがよい」「また使いたい」と話題にしていただける葬儀社になりました。（※）

いいお葬式をしたいと願う、喪主さんの頼れる伴走者でありたい、と日々知恵を絞り、こころを寄せて喪主さん、ご葬家さまのサポートをしています。

この冊子が少しでも「いいご葬儀」の助けになれば幸いです。

2011年9月

※週刊ダイヤモンド 全国350葬儀社納得度ランキング2011年 東京都6位
弊社顧客アンケート調査2011 満足度 97%

お葬儀の流れ（ご臨終～お葬儀～四十九日法要まで）

多くの場合、病院で亡くなれることが多いので、そのケースを中心に、まずは大きな流れから説明します。

1 ご臨終 ～葬儀社への連絡

- ① 医師によるご臨終の宣告後、近親者で「末期の水」の儀式を行います。
- ② 医師に死亡診断書を依頼します。（これがないければ埋葬や火葬の許可がありません。
【自宅で亡くなった場合】すぐに主治医に連絡を。）
- ③ 葬儀社に連絡します。
- ④ 【自宅以外で亡くなった場合】葬儀社の寝台車で自宅まで搬送してもらいます。

2 ご遺体安置葬儀の内容決め～葬儀社への依頼

- ① 自宅でご遺体をお清めしたあとお布団に安置します。ドライアイスなどでご遺体を保存します。
仏式・神式：北枕か西枕に安置し、小机かテーブルに枕飾り一式を整えます。
キリスト教式：枕元に十字架・聖書・花・燭台を用意します。
- ② 喪主を決めます。
- ③ 葬儀の日取り・場所を葬儀社と相談し決めます。
- ④ 寺院・神社・教会に連絡します。
（遠方で難しい場合など、葬儀社に相談して紹介してもらうこともあります）
- ⑤ 訃報を出し、関係者（親戚・近所・友人・知人・勤務先・取引先等）に連絡します。
- ⑥ 葬儀社を決め、お葬儀全般の打ち合わせをします。

3 会場設営～お通夜

- ① 祭壇並びに会場を設営します。【自宅の場合】祭壇を飾る部屋を片付け準備します）
- ② ご遺体を会場に搬送・安置します。
- ③ お通夜を行います。（通常午後 6 時、7 時ごろから）
- ④ 喪主が挨拶と謝辞を述べて、「通夜振舞い」に移ります。
- ⑤ 近親者で祭壇の線香やローソクを絶やさないよう故人をお守りします。
（夜間就寝される場合は火を消して下さいと言われるケースが多いようです）

4 葬儀・告別式の打ち合わせ（お通夜の終了後その日のうちに）

- ① 司会者・弔辞・弔電拝読・親族代表謝辞をどなたが行うか決めます。
- ② 遺影、棺を持つ人を決めます。（位牌は喪主）
- ③ 火葬場に行く人の確認と車の手配をします。
- ④ 精進落としの料理を手配します。

※初回の打ち合わせの際にだいたい決定しておき、通夜終了時に確認をするイメージです

5 葬儀・告別式～出棺・火葬

- ① お葬儀を行い、故人と最後のお別れをします。
- ② 出棺前に喪主または親族代表の挨拶を行います。
- ③ 近親者と火葬場に向かいます。
- ④（やって頂ける場合）最後の読経・火葬を行います。
- ⑤ 近親者によりお骨上げの儀式が行われます。初七日の法要を行うケースも。
- ⑥ ご自宅または精進落としの行われる場所へ向かいます。

6 初七日と精進落とし

- ① 玄関先でお清めをして、後飾り祭壇に遺骨・位牌・遺影を安置し、繰り上げ初七日法要を行います。
- ② お通夜からお葬儀までお世話になった人の労をねぎらうために「精進落とし」を行います。
- ③ 僧侶へのお布施・お膳料を渡します。

※最近では初七日を葬儀中に行い、精進落としも僧侶が同席されない場合も。その際は開式前にお布施・お膳料をお渡しします。

7 四十九日忌法要まで

- ① 翌日かその次の日までに葬儀の時にお世話になった人へ挨拶廻りを行います。
- ② 四十九日法要の日時を決定し、僧侶に依頼します。
- ③ 四十九日、または三十五日の忌明けに「香典返し」を挨拶状とともに送ります。
- ④ 四十九日をめでに納骨します。

このように手順だけでもかなりありますが、基本的には、打ち合わせ以降は葬儀社の方のエスコートに任せれば大丈夫です。以下、詳しく説明していきます。

ご臨終からご自宅安置まで

ご臨終のあとにまずすること

ご臨終の後、まずやらなければいけないのは、①「**末後の水**」の儀式と②「**死亡診断書**」の依頼です。

末後の水はお釈迦様が亡くなられる前に水を欲しがられ、弟子が鬼神から甘露水を得て差し上げたという故事によるものです。故人は水を飲むことはできませんので、新しい筆か、割り箸に脱脂綿を巻いたものに水を含ませ、唇を湿してあげてください。これは**近親者で、亡くなった病院、あるいは自宅（に帰って）で行います。**



そして**死亡診断書の依頼**です。これがないと火葬、つまりお葬式ができません。

病院で亡くなられた場合（最近はほとんどがこのケースですが）は、事務的な感じがしてしまうかもしれませんが、**主治医がいればそのまま、死亡診断書をお願いしてください。**緊急入院の際も、**搬送後24時間を経過していれば「主治医」として発行してもらうことができます。**

自宅で亡くなられた場合も、主治医がいれば、同じようにお願いして死亡診断書を発行してもらうことができます。

但し、普段お医者様に掛かっていなくて突然に亡くなられた場合は、まず警察に連絡しなくてはなりません。「事件性がない」ことの証明がいるためです。法律で決まっていることなのでどうしてもないのですが、故人のご自宅が東京23区であれば大塚の「監察医務院」で、それ以外は警察嘱託医によって「検案（または行政解剖）」をしてもらうことになります。それが終わるまで、ご遺体を自宅に帰してもらう事はできません。そこで「事件性がない」とされれば、「死体検案書」をもらうことができます。

これでお葬式の準備の入口に立つことができました。

ご臨終からご自宅安置まで

故人を自宅に連れて帰るために

末期の水と死亡診断書の依頼を終えたら、一刻も早くご自宅に連れて帰りたいのが心情ですね。

ただ、故人と一緒にご自宅へ帰ると一言でいっても、残念ながらご自宅の車など、一般車両ではむずかしいのが現実です。**葬儀社の「寝台車」に載せて帰るしかありません。**

多くの病院には、葬儀社のリストがありますので、電話をかける
と時間を問わずお迎えに来ます。

きちんと白布でおおって、ストレッチャーに乗せ、「寝台車」で
ご自宅まで送ってくれます。

寝台車にはご遺族も一人は乗れるはずです。

ご自宅に故人が到着される前に、次のような事をしていただくとよりスムーズにご安置できます。

- ・遺族の方のどなたかが先にお帰り頂いて、お部屋をお掃除されてください。
- ・いつものお布団でかまいませんので、きれいなシーツをかけておいてください。
- ・お時間があれば、お運びする上で、障害物になるもの（たとえばスリッパ立てや置物など）を移動しておいて下さい。

自宅に帰ってまず故人にしてあげること

自宅の安置する部屋に着いたら、きれいなシーツのかかったおふとんの上に安置します。**仏式・神式なら、北枕か西枕です。**

ドライアイス为首の左右の頸動脈のあたりとおなかの上に載せ、お布団をおかけしてご遺体を保存します。**ドライアイスはおよそ1日1万円ほどですが、冬場でもご遺体はいたんでしまいますので必要だと考えて下さい。**

小机かテーブルに「枕飾り」の一式を整えます。

これは御家族やご弔問の方に焼香（玉串奉奠、献花）いただけるよう
にするためのものです。



参考図：枕飾り

ろうそくの火や線香はあの世の旅先を照らすものなので、絶やさな
いように、とされていますが、火事になっては大変なので、せめて香
りを絶やさずにするために「うず巻き線香」をおすすめしてい
ます。

これだと**12時間**くらい持ちます。

(参考価格／線香：700～1500円。台400円～1000円)



枕飾りは、正確には宗派によって多少の違いがあります。

ちなみにうちの葬儀社では、前ページの画像のような関東式の枕飾りをスタッフが机・白布も含め、
ひとそろい寝台車内に常備しています。

(幕ありの場合 35,000円。神式・キリスト教式も同額)

キリスト教式だと枕元に十字架・燭台を葬儀社が用意し、聖書はご家庭にあるものを使うケースが
多いです。

これで御家族やご弔問の方に焼香（玉串奉奠、献花）いただけるようになりました。ちょっと一息
して、可能ならば、できるだけ早く打ち合わせにはいりましょう。

決めること ① 翌日までに決めたいこと

ご遺体を自宅にご安置後は、さっそくお葬儀の打ち合わせをはじめなくてははいけません。ドライアイスで保護しているものの、ご遺体はこうしているうちにもいたんでゆくものです。まずは**早く**に「いつ」「どこで」お葬儀をするのかを決めましょう。

もし、何らかの事情でお葬儀が数日後ということであれば、ご遺体を「**一時安置場所（保管庫）**」に移したほうがいいのかもあります。少なくとも、早めに納棺いただいたほうがよいでしょう。（密閉度が高いので、保存性は高まります）

打ち合わせにあたっては、複数人出席していただくほうがよいと思います。皆さん悲しみとお疲れの中での打ち合わせ、しかもさまざまな決めごとがありますので、行き違い・思い違いをできる限り避けるためです。

葬儀の日時・場所はどうやって決まる？

① 宗教者の都合を聞く

まず、**葬儀スタッフが同席しているときに菩提寺（教会・神社）に連絡し、儀式を行っていただく寺院関係者（お坊さん、司祭さん、神主さん）のスケジュールを聞きます**。つながったら葬祭スタッフに電話をかわり、きいてもらうとよいでしょう。

寺院・神社・教会が遠方で難しい場合などは、葬儀社に相談して紹介してもらうこともあります。

② 式場をどこにするか決める

それに合わせて葬儀スタッフが「どこでやるか？」、つまり、式を執り行う場所を見つかります。**スタッフに条件を言って、いくつか提示してもらうのがいいでしょう**。（相場については→P.11）

「会葬者の予想人数は？」「来てほしい人はどんな人が中心になるか？」を考えて決めてゆきます。地元の人・故人の近隣の知己が中心なら、その最寄りの寺院など、仕事・職場関係などが主ならアクセスのいいところ になりますね。

提示してもらった施設については控室なども含めおおよその使い方イメージを教えてください（祭壇はここ、焼香待ちの方はこちらに、通夜振舞いの会場はここ、など）

③ 式の日時を確定する

最終的な日時は、**式場付近の斎場（火葬場）**の空き状況によります。その情報を持って
いるのも葬儀社のスタッフです。

その後スタッフが霊柩車を手配することになります。

連絡のコツ、訃報の出し方

おおよそ打ち合わせから数日後にお式となりますから、関係者へのご連絡は、密葬・家族葬はさておき、一般的な個人葬や社葬・合同葬だとちょっと急ぎたいものです。

しかも最後のお別れになるわけですから「連絡が来なかった」「知らされてない」という方が出てこないよう、手を尽くさなくてははいけません。

会社や取引先関係は、まず総務に FAX やメールを入れればいいでしょう。親戚はフットワークのよさそうな方に連絡をお願いすれば間に合いますね。

問題はその他のプライベート関係・仕事以外の親交などです。意外と家族の知らない交友関係があるものです。こちらは**知っている限りの故人の親しかった方たちに相談して、キーマンを見つけ手繰ること**になります。

また、この訃報をみて、供花や弔電がとどくことになりますので、**できれば連絡は葬儀社を通じて FAX の形がスマート**です。ご葬家からだと供花の催促をしている印象をもたれる方もいるからです。

葬儀社を窓口にすることで、供花もばらばらにならずにすむというメリットもあります。

訃 報	
各 位	平成 年 月 日
故 月 日逝去致しました。生前のご厚情に深謝し謹んでお知らせ致します。 尚、通夜式、葬儀・告別式は下記の通り執り行います。	
— 記 —	
喪 主	続柄
通 夜	月 日 () 午後 6 時 00 分 ～ 午後 7 時 00 分
葬 儀	月 日 () 時 00 分 ～ 午後 時 00 分 出棺
場 所	
住 所	
式場地図	
※ 生花・花輪などの御用命、ご不明な点など御座いましたら大変お手数ですが下記までご連絡をお願い致します。	
株式会社 AZUMA TEL 0422-49-0001 東 葬 祭 FAX 0422-49-0002 担当	

直葬・家族葬の落とし穴

会場がおさえられたら、どんなお葬儀にしたいか、おおまかなイメージをして、具体的な打ち合わせに入ります。

ちなみに、打ち合わせをさせていただくと、最近は「直葬」「火葬式」といった、簡素なお葬式について質問されることが多くなりましたね。費用や手間が少なく抑えられるところを魅力に感じているのだと思います。

また、ごくごく近い人や直系の家族で、いわば「水入らず」で見送れる「家族葬」も人気です。

ただ、実際に、家族葬や直葬を行われたご家族にうかがうと、
「あとから『お線香をあげたい』と自宅に弔問客が絶えず…かえって大変です」
「親戚から文句を言われつづけることになってしまいました…」
というお話も少なくありません。

「水入らずでゆっくりとお別れ」にするためには、周りへの十二分な配慮や準備、言いかえれば「根回し」が必要な場合があるという事です。

実際のところ、故人の交友関係がどれほどの範囲でどれほどの深さなのかは、ご本人しかわからないものです。また、故人の気付かないところで非常にご縁を感じていらっしゃる方も多いかもかもしれません。

お葬儀は故人のための場であり、ご縁があった方の最後のお別れの場です。なので、まずは、故人とその方たちに心残りが無い形をとってさしあげるのが大切ではないでしょうか。

それがのちのち、遺族の方々にとってもいいことなのではと思います。



知っておきたい葬儀費用の内訳

最近の葬儀社の広告でよく見かけるのが、「家族葬 ●●万円～」「総費用 ●●万円」というものですが、**実はその額で済まないことが多いのです。**

それは、お葬儀の費用は大きく 3 つに分かれていて、最初から見積もりの他になるものがあったり、葬儀社によってどれを含むかが違う場合もあるからです。

詳細の打ち合わせに入る前に、知っておいたほうがよいでしょう。

「葬儀費用」の内訳を大別すると、大きく 3 つに分かれます。

一つは、葬儀社に払って葬儀社が受け取る費用。

祭壇や遺影、会場の装飾品などです。**固定費とはいえ、グレードによって異なります。**基本のセットとそれ以上のものが価格とクオリティでどのくらい違うのかを確かめた方がいでしょう。

もう一つは、葬儀社から専門業者などに行く費用。

会場使用料や火葬費は固定ですが、お花は会場に見合った数によって、お料理や会葬返礼品は**会葬者の数によって、変動します。**どのくらいかかるのかシミュレーションしてもらわないとあとから請求書をみてびっくりすることになります。

そして、寺院関係の費用。

2 日間の読経のお布施、お車代、戒名のためのお布施などです。**ほとんどの広告では 3 番目の費用は含んでいません。**実はここがまとまった金額（東京西部だと 50 万円～ 80 万円）でもあるので、菩提寺に確認しておくか、葬儀スタッフに聞くことができないと大変なことになります。

どちらにしても「こんなものなんだろう」「これで済むのだろう」と思わずに「本当にこれしかかからないのか」「この金額で何がどれだけ実現できるのか」短刀直入にきいてみる必要がありますね。

決めること ② 式に必要なあれこれ

式場料金の相場

実際の会場の使用料ですが、「会場使用」のみ）お通夜と告別式の2日間使用と考えると、**民間の会場**は以下のようになります。

東京23区 : 30万円程度～

*参考（有名葬儀会場／ 青山葬儀所：130～192万円
築地本願寺：（第二伝道会館）80万円
（本堂）400万円超

東京多摩地区 : 18～25万円が最多

都内の有名会場については、故人のたつてのご希望や、会葬者が2000人を超えそうな場合、また、社会的地位からの配慮などで、お住まいの地域に関わらず選ばれるご遺族があり、それなりに人気があります。

多摩地区に関しては、都内に比べて広さが確保しやすいということから、だいたい会葬者1000人までであれば対応できる会場はありますし、100人前後にちょうど良い会場も、小じんまりした会場も選べます。

この他に、格段に安いのが**公営の会場**です。数万円程度から利用できます。規模としては50～100人対応のところが多いです。

ただし、民間のように誰でも電話で予約OK、というわけにはいきません。市役所などに申し込むのですが、利用者の制限（住所・所得など）や、数回にわたる書類提出の必要があります。最近は込み合っていて予約待ち、という場合も多いようです。



祭壇の種類

もともと、**お葬儀の祭壇**は故人があの世にいくための乗りものという意味合いがあります。

昔ながらの白木の祭壇がお祭りのおみこしに似ているのはそのため、もともとの形は祭壇の中に棺が入るように設計されているものです。

とはいえ、最近ではその形にこだわらず、様々な祭壇をご希望の方もふえており、オリジナルの祭壇も増えています。

白木祭壇は大きく分けて形状から3つのグレードに分かれます

■ 本輿（ほんごし）

後方にも屋根・装飾がある全形のもの。
（＊都内ではうちを含めて数社のみ所有。）



■ 半輿（はんごし）

通常みられる大きな一つ屋根のもの。
前面のみ装飾がある。



■ 三枚輿

三つに屋根が分かれている簡易タイプ。



■ 花祭壇、オリジナル祭壇



意外に量がいるお花

花祭壇でも白木の祭壇であっても、周囲に供えるお花（供花）があります。

一籠で、名札がついたもの（●●一同、とか）を「1基」と数えますが、目安として**だいたい20基くらい必要**です。

ご葬家から「親戚一同」「子供一同」など名札をつけて、祭壇のまわりに配置していき、加えて遠くの親戚や会社などからお申込みがあると「株式会社●●●●」などと名札をつけてさらに配置していきます。



葬儀社によっては、事前に**配置図**のほうを葬祭スタッフが作成し、FAXしてくれます。当日は、その日に届いたお花を含め、葬家と葬祭スタッフとで並び順を確認することになります。

このお花は、**会場の飾りであると同時に、最後のお別れの際に、お棺の中に皆さんで入れてさしあげるもので、また、初七日法要の時に必要な2基と、ご自宅に帰られてからの後飾りの2基も兼ねています。**足りなくならないように適正な

数を葬祭スタッフに用意してもらえるように注文しましょう。

1基が15,750円（関東近郊基準）。

ちなみにうちの葬儀社のお花は、菊の本数にして一基当たり33～35本。少し多めになっています。



1基のお花の例→

遺影の選び方

遺影選びは、意外とみなさん難しいとおっしゃいますが、**最新のものにこだわらず、基本的に、故人がその方らしい、輝いていらっしゃる顔**を選ばれて下さい、とご案内しています。お病気でやつられる前の、お元気だったころのお姿はいいものです。

他の方と写られていても大丈夫です。故人だけを写し取って、それに合う背景を作成することもできます。

服を変えることもできますが、あまりお勧めはしていません。見慣れていらっしゃるご親族の目から見ると、肩のラインがどうしても不自然になってしまうからです。**普段の服装で十分**です。

遺影の大きさは、よく使われる四つ切りサイズ（新聞を4等分したもの）で3万5000円から。祭壇の上部にそれをおき、手前に**ご自宅で飾るものを兼ねて手札サイズ（8.3×10.8、9000円～）**をおかれるケースも多いです。

お料理の注意点

かつては、夜を徹しての酒宴になることも少なくなかった**通夜振舞い**ですが、最近では半通夜が多くなり、簡単にすませることが一般的になっています。

また、肉や生ものを使わない精進料理が本来の形でしたが、最近ではあまりこだわりません。鮎、サンドイッチ、おにぎり、オードブルなどをそれぞれ小皿にとって召し上っていただく形が宜しいでしょう。

お料理の手配の量は参列者の予想の数そのものでなくてOKです。**参列者のおおよそ半分ぐらいが目安**です。足りなくなったら？と思われるかもしれませんが、常に状況をチェックし、**臨機応変に対応できるように、葬祭スタッフや配膳スタッフが準備**をしています。



お棺事情（大きさと素材）

お棺はご遺体と一緒に燃やされてしまうものですが、故人にとっては最後の家でもあります。だからちょっと贅沢をさせてあげたいですね。

価格は8万円～200万円、素材も様々です。

素材で一般的なのは木で、「檜」が最上級、そして「樅」「桐」がありますが、桐でも十分です。板の厚みもランクに関係してきます。「十分（じゅうぶ）」が最高ですが、その下にもう少し薄い「八分」「六分」があります。一般的には「桐八（きりはち）」と呼ばれる桐板の八分が多いです。（樅、檜も八分があります）廉価品としては「桐六」があります。

写真は「平棺」。シンプルな表面に装飾のない「むく」のものを指します。こちらは8万円～。



「二面彫刻」で100万円、
「5面彫刻」を施すと200万円ほどです。



表面に布張りした「布張り棺」、柔らかい印象ですね。20万円～。



強化段ボールを使ったもの、間伐材を使ったエコに配慮したものなどもあります。

こちらは「エコフィン W I L L」。

坂本龍一さんプロデュースのお棺です。



以上のような仏式のお棺の他にも「キリスト棺」もあります。



また、大きさも選ぶことができます。標準的なものとして用いられるのは、「6尺=約1.8m」「6尺2寸5分=1.88m」「6尺5寸=1.95m」です。

この他、大きいもの・小さいもののオーダーはできますが、注意したいのは、葬斎場の窯のサイズです。上記の標準サイズならば、東京近郊では問題ありませんが、最後の家が立派過ぎて火葬炉に収まらない！！という事態もなくはありません。大きな棺の方、地方のお葬儀の方、要チェックです！

旅立ちのお支度（死に装束）

故人がお棺に入る際に身につける衣装を一般に「死に装束」といいます。ご遺体をお清めして、それを身につけさせるのですが、時間がたつとお体も固くなってきますので、納棺の際に一式身につけて差し上げます。

神式では、白い小袖を着せます。

キリスト教式では、とくに決められた死装束はなく、服装は自由です。故人の身に着けていた十字架を持たせる場合もあります。

最近では、仏式でも故人の好きだった服をそのまま着せて、ということも増えていますが、ここでは一般的に用いられている伝統的なものをご紹介します。

仏教の伝統的な死装束には、図のようなもので、経帷子（きょうかたびら）・頭巾・上帯（うわおび）・手甲（てっこう）・脚絆（きゃはん）・足袋・草履・杖・六文銭・頭陀袋（ずだぶくろ）などからなります。

あの世への旅したくのひとそろいという意味なのです。実はお遍路さんの服装もこれにならったものです。

■経帷子（きょうかたびら）

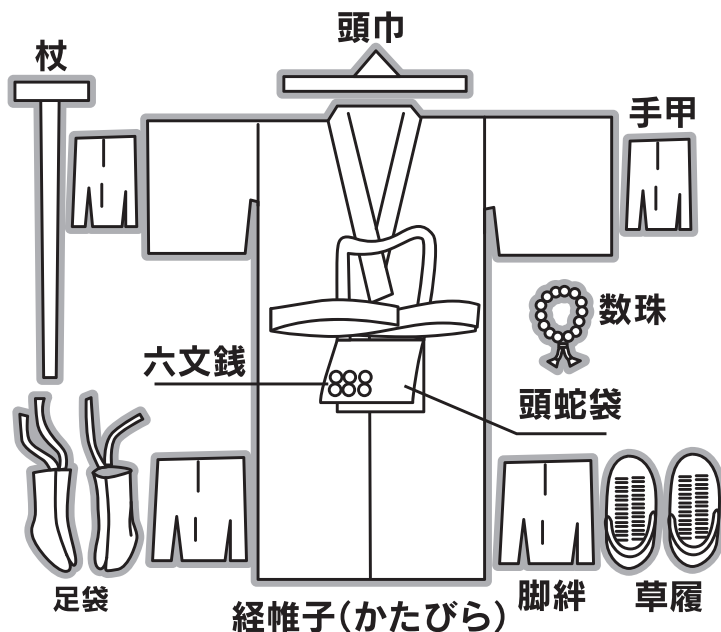
麻や木綿などの単衣の白い着物です。これに経文を書き、その力で生前の罪滅ぼしをするといわれています。通常と違い左前に着せます。

■頭巾・天冠（てんかん）

はちまきに三角形の布や紙を取り付けた冠のことです。

■頭陀袋（ずだぶくろ）

修行僧が托鉢（たくはつ）するとき、経文や布施（ふせ）を入れるために首から提げる袋と同じ形です。この中に、三途の川（あの世とこの世の境の川）の渡し船のお金として六文銭を入れます。



寝台車と霊柩車

お葬式でお式のほかに忘れてはならないのが車の手配です。

最初にスタッフが病院からご自宅までは搬送させていただきましたが、通夜当日にご自宅から式場への搬送があり、葬儀当日に式場から火葬場への搬送、そして火葬場からの帰りの車が必要です。

ご遺体を乗せる霊柩車は祭壇を模した形のお宮を乗せた「宮型」と、最近ではお宮のない「洋型」もよく使われています。



基本的に、葬祭スタッフが手配をしてくれますが、火葬場へのご移動で人数が多いようでしたら、別途マイクロバスなどの追加も考えたほうがいいでしょう。（別料金になります）その際は、火葬場によって、自家用車の台数が制限されますので、注意が必要です。

戒名の意味・お布施の相場

お葬儀当日は、読経にあたってお寺や僧侶に払う費用、お布施があります。基本的にお布施に「相場」はありません。仏様にお供えするものを預かっていただく、というものなのでお寺さんにご遺族の関係によってもその金額はかわるからです。あくまで目安になりますが

葬儀 2 日間の（通夜～告別式、初七日）の読経のお布施	25 万円
お車代	1 万円
お膳料（精進落としなどにいらっしゃらなかった場合）	1 万円

また、戒名をいただくために、

法名（号）は（信士、居士）35 ～ 40 万円、
院号は 70 万円～必要です。（東京の多摩地域のめやす）

「戒名はつけなくてはいけないのでしょうか？」とご質問もよくいただきますが、**お墓に入るのにはその宗派、菩提寺から戒名を頂かなくてはならないことがほとんどです。**つまり戒名は「仏弟子」となったということですから、「つけていただく」「授かる」ものであり、**勝手に自分たちでつけるものではありません。**

宗派によってその名前の付け方は異なりますが、基本的には上から順番に以下の構成になっています。

院号：

法名（法号）： 生前の故人の名前から一字を取ってつける名前

位号： 仏教徒の階級（居士、大姉、信士、信女、童子、童女など。主に没年齢によります）

置字： 位牌のことを意味する言葉（霊位又は位など）

お寺によっても金額は変わりますので、個別にご相談いただければと思います

会葬礼状・返礼品

参列いただいた方にお渡しする小さな手提げには**会葬礼状と返礼品**が入ります。

文字通り、「会葬」いただいた方へのお礼で、**お礼状と粗品とお清め塩をセット**にしています。

一組 800 ～ 1000 円程度が目安で、粗品は生ものでなく、かさばらないものがよいとされています。



お礼状は葬儀社にひな型があり、葬儀スタッフに会葬予想を伝えると、たいていの葬儀社で**礼状は100通単位で（当社では50通単位）で発注**し、お通夜の受付に間に合うようにスタッフが手配します。**返礼品は使用分だけの清算**となります。

後日、お香典を送ってくる方や持って来る方もいらっしゃるため、少し多めに用意されることをお勧めします。

これで、おおよその物の手配は終わりました。

次ページからは実際のお葬儀の流れと場面々々で気をつけたいことを解説します。

1 日目に気をつけること

通夜当日、通夜が 18 時からの場合、大よそのスケジュールは以下のようになります。

16:30	喪主・遺族到着	控室にて休憩していただきます。 会場にてお花の並び順などの確認をします。
17:30	僧侶到着	僧侶控室に喪主はご挨拶に伺います。
17:30	受付開始	
17:50	一同着席	遺族や親族は所定の席へ着席します。
18:00	お通夜開式	
18:05	僧侶入場・読経	通常 30 分～ 40 分ですが、宗派や僧侶の方によって異なります。
18:15	焼香開始	ご焼香のご案内があり、喪主 → 遺族 → 親族 → 一般参列者の順番で焼香を行います。
18:40	僧侶退席	
18:55	閉式の辞	受付などの手伝いをしていただいた方はここで解散です。
19:00	通夜振る舞い	
21:00	通夜振る舞い終了	
21:00 ～	打ち合わせ	翌日の確認をします。 (弔辞・弔電拝読・親族代表謝辞の担当、遺影・棺を持つ人、火葬場に行く人、車の数、精進落としの人数)

お布施と寸志、協力者へのお礼

基本的にお坊さまなどの宗教者への「お布施・お車代などは前渡し」と覚えておきましょう。読経のお布施は、到着されて、控室に入られた際、ご挨拶に伺うその時がよいでしょう。通夜ぶるまいに出られないことが分かっている場合は「お膳料」もお渡ししてしまってもかまいません。

2日目のことになりますが、火葬場のスタッフの方、霊柩車の運転の方にもそれぞれ3000～5000円渡すのも通例です。準備をしておきましょう。

受付などを担当してくれた方たちは、通夜ぶるまいにお誘いしたり、後日職場の方たちであれば、みんなで分け合って食べられるもの、菓子折りなどを持参してお礼に伺う、個人の方であればすこしランクが上の香典返しを送るなどすればよいでしょう。

弔電やいただいたお花の扱い

式当日にお花や弔電がとどくことがあります。

お花（供花）の場合、お葬儀開始の前ならば、喪主かそれに近い人が立ち会いのもと、並び順をチェックすることになります。関係順を考え、中に組み込むのですが、どうしても、お花の種類や量などちぐはぐ感は否めません。悩ましいところですね。

※こういったことを防ぐ意味でも訃報は葬儀社から一括FAXがいいように思います。ご葬家からだと、事務的にも煩雑になりますし、お花を催促されているような印象をあたえてしまいかねないからです。葬儀社からだと、お花もその葬儀社に連絡が入ることになるので、実際の物も、また時間的にもばらつきがぐっと少なくなります。

供花のお返しについては東京ではお礼状にとどめますが、いくつかの地域では香典と同じ感覚で、半分ほどの金額を目安に、カタログギフトや菓子折りをおくるところもあります。

贈られた供花の価格については、葬儀社にきいてみるとよいでしょう

弔電の場合、当日お葬儀の式場に届けられ、葬祭スタッフが喪主や親族の控室に持ってきてくれます。**親族で系統別に仕分けしておき、その中から優先順位を付けておきます。**葬祭スタッフと相談して、かならず読みあげたいもの・できれば読みあげたいもの・名前の紹介だけはしたいものを決めておくといいでしょう。当日臨機応変に紹介してくれるはずです。

お葬儀当日の参列者の数によってどれだけ弔電の紹介ができるかも変わりますが、おおよそ**全文読み上げが3～5通、お名前の紹介が10通**といったところでしょうか。必ずしもすべて読みあげなくても大丈夫です。祭壇の前にお供えしておきましょう。

ちなみに**弔電に関しては、お礼状のみのお返し**で十分だと思います。

2 日目に気をつけること

お葬儀が 11 時からの場合、大よそのスケジュールは以下のようになります。

10:00	喪主・遺族到着	控室にて弔電の確認などの確認をします。
10:30	僧侶到着	控室に喪主はご挨拶に伺います。
10:30	受付開始	
10:50	一同着席	遺族や親族の所定の席へ着席します。
11:00	葬儀・告別式開式	
11:01	僧侶入場・読経	通常 30 分～ 40 分ですが、宗派や僧侶の方によって異なります。
11:15	僧侶引導	
11:20	焼香開始	ご焼香のご案内があり、喪主 → 遺族 ⇒ 親族 ⇒ 一般参列者の順番で焼香を行います。
11:40	葬儀・告別式閉式	
11:42	ご出棺準備・最期のお別れ	お花をお柩に入れてふたととじます。
11:55	出棺挨拶	
12:00	火葬場へ出発	
12:20	荼毘	
13:10	ご収骨	ご遺骨をみなさんで骨壺に納めます。
14:00	初七日繰り上げ法要	※葬儀の中で行ってしまうこともあります。
14:30	精進落し	主に家族と葬儀のお手伝いをいただいた方の慰労です。
15:30	解散	

火葬場でのこと

お葬儀の会場から火葬場へうつり、ここからは近親者の方たちだけで少し静かに最後のお別れの時間を過ごします。

火葬炉に入ってゆくご遺体を見送ります。可能ならば、僧侶の方に最後の読経をいただきますが、静かに手をあわせて、扉が閉じられるのを見届けるだけでもよいでしょう。

ここからしばらく、**火葬が終わるまで控室で待つ**ようになります。**係りの方に御心付けを渡すのを忘れなく**。(僧侶の方がここで帰りになられるようでしたら、火葬が始まる前にお布施・お膳料・お車代などをお渡しします。)

火葬が終わると、また窯の前に移動し、**お骨上げ**を行います。案内がありますが、**喪主を中心に二人一組になり、一緒に箸を添えて足の骨から骨壺へおさめ、一番最後に「のど仏」と言われる部分を上に載せてふたを閉じ、ふろしきなどに包みます**。

喪主がお骨を抱え、準ずる方がご位牌、お写真を持って、精進落としを行う会場に向かいます。

後飾り祭壇

式場に戻られたら（式後、ご自宅ならば、玄関先でお清めをして、）後飾り祭壇に遺骨・位牌・遺影を安置します。

これは四十九日までのお飾りで、「**中陰段**」と呼ばれます。**霊から次の生まれ変わり先が決まるまでの間の供養の場**です。

2段か3段の白布を敷いた祭壇に**上段にご位牌・お骨・お写真、中段に三つ具足**と呼ばれる、香炉・燭台・線香入れ、そしておりん、**この下にお供え物**を飾ります。そして、**お葬儀で使ったお花を二基、両脇に配置**します。

ご自宅に飾られる場合は一カ月以上ご自宅にあるわけですから、生活に邪魔にならないような場所に、南または西向きに飾ります。



初七日法要・精進落とし

繰り上げ初七日法要ですが、今はお葬儀中で行う場合、火葬場で行う場合、火葬後行う場合と様々です。お坊さんにお任せすることになります。

最後に「精進落とし」を行います。本来は、お通夜からお葬儀までお世話になった人の労をねぎらうために行うものですが、初七日を葬儀中に行ってしまい、精進落としも辞退される場合も多くなりました。（その場合は僧侶に開式前にお布施・お膳料・お車代をお渡ししておく方がいいですね。）ご親族だけで松花堂弁当をいただく、ということもめずらしくありません。

乾杯ならぬ「献杯」はだいたい喪主、または親戚の年長者の方が務めます。お葬儀当日最後の喪主のお仕事になりますね。

お葬儀のあと～法事とお付き合い

お葬儀が終わって、一番大きな仕事は終わりましたが、その後のお付き合いも忘れず、スケジュールに心づもっておきたいものです。

お葬儀後のあいさつまわり

お葬儀が終わって、早めにお世話になった方へのお礼のあいさつまわりをしましょう。具体的には、**受付などの係りのとりまとめになって下さった方と、いらっしゃれば葬儀委員長、そしてお寺さん**に伺います。

係りの方は、本来一人一人にお礼を言うべきなのですが、それはかなり大変なので、取りまとめの方に「みなさんによろしくお伝えください」とみんなで分け合える菓子折りなどを持参します。

葬儀委員長さんもあわせてできれば忌引きのうちに**ごあいさつ**をしたいですね。

お寺さんは、お葬儀から**2週間後あたりに、四十九日法要と納骨のうちあわせもかねて**伺いましょう。ここでも気持ちとして菓子折りなどをお持ちします。

納骨・四十九日

四十九日は別名「満中陰」と呼ばれ、この日が忌明けとされます。ここを境に次の生まれ変わりが決定し、「霊」から「仏」になり、ご位牌も白木から本式のものになります。**法要は四十九日までに**すませればよいとされています。

納骨は、地域によって異なりますが、関東では一般的に四十九日法要の際に**「納骨法要」**の形で行います。

ちなみに納骨も、許可証がないとできません。死亡届を提出した際、市町村役場から**「埋火葬許可証」**をもらったと思います。**火葬が終わると表の火葬の欄に印が押され、裏側の埋葬許可が有効になります。**

おそらく、納骨の際に忘れないよう、火葬場のスタッフの方がお骨とそれを納めた箱の間に入れてくれていると思います。確認して忘れず持参しましょう。

当日は、会式の前に、僧侶の方にお布施をおわたしします。**目安は3～10万円、これに加えてお車代（1万円）**です。飲食の席を設けて、それにお出になられない場合は、お膳料（1万円）も必要になります。また、**卒塔婆供養を行う場合は一本3千円**ほどです。

石材屋さんと参列者がそろったら、僧侶の方とお墓に行き、ご遺骨を入れるための「納骨法要」を行います。通常は、**お掃除→読経→焼香→納骨→読経→焼香** という流れで行われます。

後ほど、石材屋さんには墓石設置費用のほかに「**志**」として**5千円～1万円**をつつみます。

香典返し

四十九日をめどに、香典返しをしましょう。

これは、お供物やお香典をいただいた人のみでOKです。（**目安としては5000円以上の方**でよいでしょう。）

お礼状を添えた品物を送ります。金額的には、昔から半返しと言われていますが、今は**半額～1/3の額が目安**です。頂いた金額別に三段階くらいのもので用意し、それぞれの金額に合ったものをお返しします。

不祝儀のお返し・お礼なので、石鹸やお茶など後に残らないものが良いとされます。とはいえ、今はそのあたりは緩やかになっており、実用品としてタオルやハンカチ、最近では金額別のカタログギフトなども多くなってきました。

品物にはのし（紙）をかけます。**関東では「志」が一般的**です（**関西では「満中陰志」**）。

お香典返しに添える**お礼状（挨拶状・挨拶文）**は、文中では、句読点の「、」や「。」は使いません。これは、葬儀や法事がとどこおりなく流れますようにという意味や、つつがなく終わりましたという意味をこめて用いないのです。



忌中・喪中の過ごし方

近親者が亡くなった場合、しばらく身を慎む期間のことを「忌中」や「喪中」といいます。

忌中は四十九日までの期間のことです。

この期間は仏教では、亡くなった方の次の行く先がきまるまでの期間（中陰）です。そこで、閻魔大王さまから良い裁きを受けるようにと願って、追善法要したり、身を慎むんですね。現在では、故人の冥福を祈り、晴れがましいことや派手な行動を慎む期間とされています。

たとえば、お正月の期間に重なった場合、門や玄関の正月飾り（門松なども）、鏡餅等の飾り付け、正月料理、お屠蘇でのお祝いはしません。年始まわりや神社、仏閣などへの初詣も控えるのが一般的です。

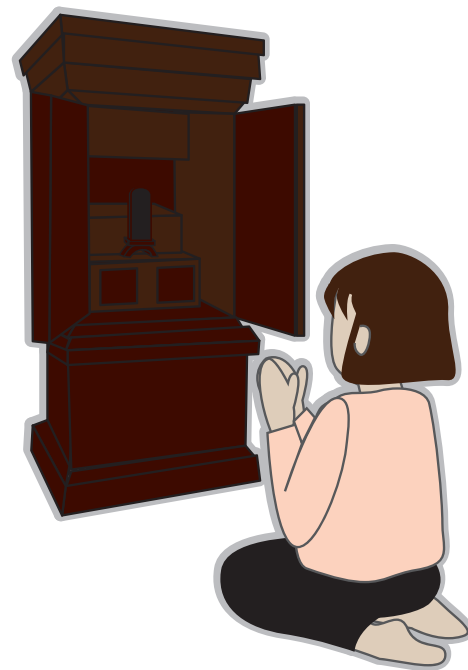
できれば、婚礼の席も本来は辞退したいところですが、今は周囲の状況と個人の判断によるところが多いでしょうか。

喪中は一周忌までのおおよそ 1 年の期間のことです。

「服喪期間」ともよばれますが、これは元々の意味は「喪服を着用する期間」という意味です。現在では喪服を着用し続けることはなく、過ごし方としては、忌中に準じますが、お正月も、おせちを普通の食事として食べたり、子供にお年玉をあげるのも、一般的に許されているようです。

また、「あけましておめでとう」など年始のあいさつは控えて、**喪中葉書**を出します。みなさんが年賀状の準備を始める前、**11 月下旬からおそくとも 12 月上旬には出した**いものです。

ちなみに「自分が喪中である」として、**周囲に知らせる**ご不幸の範囲ですが、**配偶者・子供、本人及び配偶者の両親・兄弟姉妹・祖父母までとするのが一般的**です。これも基本的には本人の考え方によりますね。



初盆

地域によって「初盆」（はつぼん）または「新盆」（にいぼん・あらぼん・しんぼん）と呼び方は様々ですが、遺族はもちろん親族や知人などが集まって、特に丁重に供養を行うのがこのはじめてのお盆です。ただし、四十九日の忌明け前にお盆を迎える場合は、初盆の法要は翌年の夏に持ち越します。

7月または8月の13日に迎え火（麻幹 - おがら）を焚いてご先祖の霊をお迎えし、初盆法要をして、近親者を招いて供養し16日に送り火でふたたび御浄土に送り出すという流れです。



前もって、お呼びしたい方に連絡・案内を出し、お寺にも連絡をとっておきます。お布施は初盆に限っては1万円から3万円。（翌年からは3千円～1万円）会食を取る場合はその手配もお忘れなく。



服装は喪服がベストですが、暑い時期ですので、地味な服装であれば良いと思います。（おいでになる方にもその旨お伝えできると親切ですね。）

お供えは盆棚・精霊棚（しょうりょうだな）をもうけますが、最近は仏壇で代用したり、新仏の祭壇を用意したり、小机に白布をかけたものなど様々です。

位牌を中心に、野菜、果物、素麺、団子や故人様の好物などを供えます。

「精霊馬」と呼ばれる、きゅうりに割り箸を刺して作った馬やナスで作った牛を供えるところも多いです。娑婆に来る時は馬に乗って早く来てもらい、帰りは牛に乗ってゆっくりお帰りいただくという願いを込めたものです。

ちょうちんを飾るのは、故人の霊が迷わずに来ることができるようにとの目印です。回り灯籠のようなものはご先祖様や初盆以外の故人用です。初盆の場合は家紋の入った白提灯を飾るのがしきたりで、これはお盆が終わると送り火で燃やしたりお寺で供養していただいたりします。

盆提灯は本来は親戚から贈られるものなのですが、住宅事情もあるので、確認してからの方が無難です。「御提灯代」として不祝儀袋に表書きをし、1万円～2万円程度を包むという方法もあります。



年忌法要について

四十九日を終えると、仏教的には生まれ変わる先が決定し「忌中」は明けて、この先は「年忌」というカレンダーにうつっていきます。

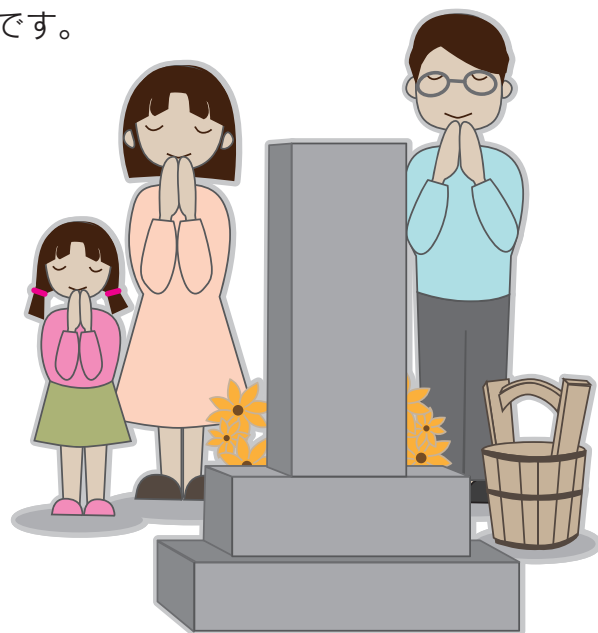
百ヶ日	…	卒哭忌（そっこくき）
一周忌	…	没後、最初（翌年）の祥月命日。一般に、この日までが「喪中」とされます。
三回忌	…	没後、2年目の祥月命日。

一般的には、親類を呼ぶのは三回忌までが多いようです。東京では四十九日のあとは一周忌を行うのが一般的です。

開催のしかたには決まった形はないのですが、お寺であるいは自宅の仏壇の前で法要をしていただき、会食という形が多いようです。お寺や参列される方への事前連絡などは喪主が中心になって行うことになります。

その後の以下の法要は近親者のみで行うことが多いようです。

七回忌	…	没後、6年目の祥月命日。
十三回忌	…	没後、12年目の祥月命日。
十七回忌	…	没後、16年目の祥月命日。
二十三回忌	…	没後、22年目の祥月命日。
二十五回忌	…	没後、24年目の祥月命日。
二十七回忌	…	没後、26年目の祥月命日。
三十三回忌	…	没後、32年目の祥月命日。
三十七回忌	…	没後、36年目の祥月命日。
五十回（遠）忌	…	没後、49年目の祥月命日。



ただし、「二十三回忌」、「二十五回忌」、「二十七回忌」、「三十七回忌」は、宗旨や地域によって営まないこともあります。

以降 50 年毎に、百回遠忌（99 年目）、百五十回遠忌（149 年目）…と続きますが、実際のところ、供養する側のほうがまだ生きているのか？ということもあり、「三十三回忌」、もしくは「五十回（遠）忌」を最後の年忌にするのが一般的です。「弔い上げ」や「問切り」と呼んでおり、その時に、寺への寄進や永代供養を行います。

大変だな・・・と思われる方もいるかもしれませんが、法事を通じて親族が集まり語り合うこと、故人に感謝することは故人のためにも、また実は自分たちのためにも良いことかと思います。